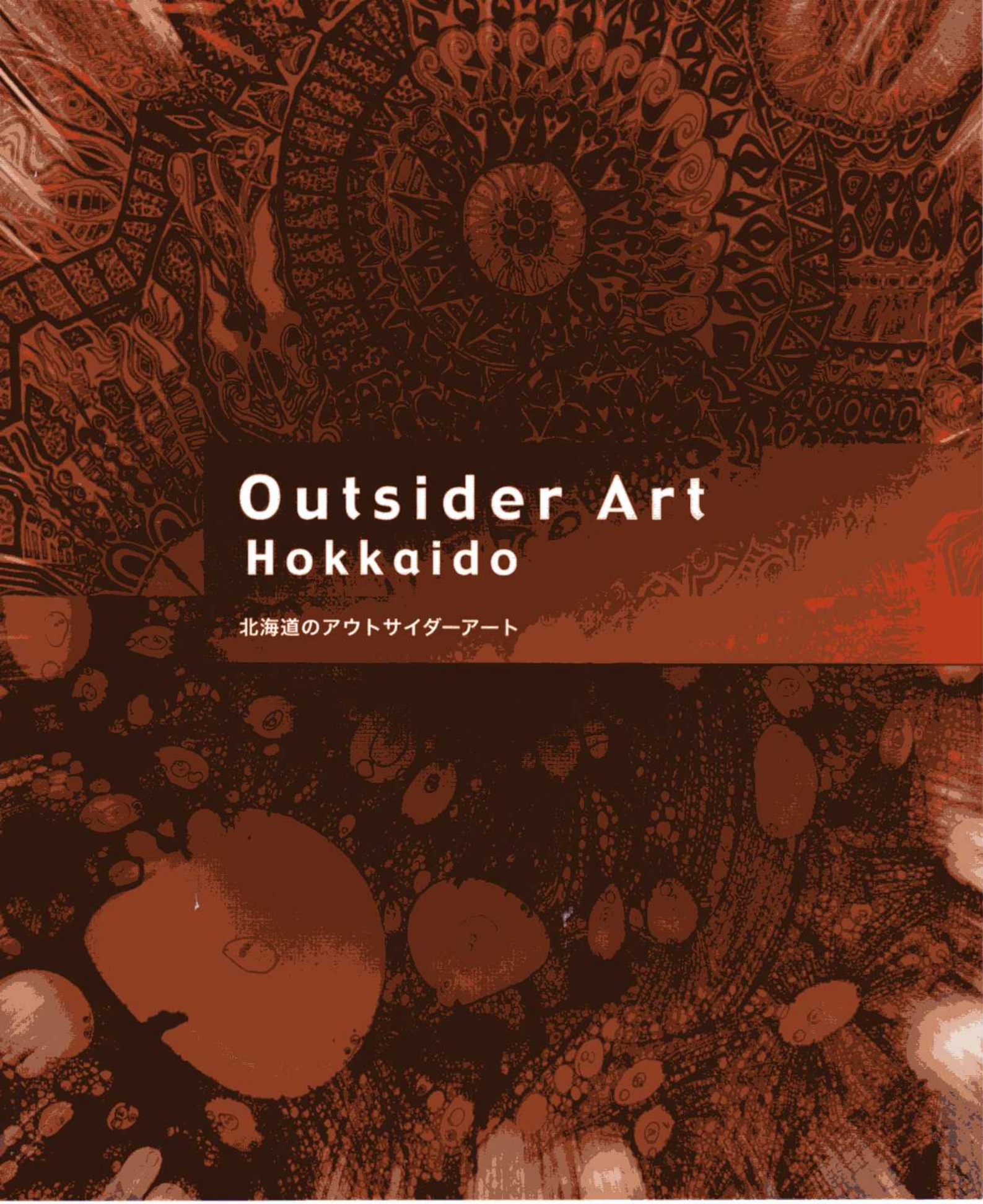


Outsider Art
Hokkaido

北海道のアウトサイダーアート

ごあいさつ

「アウトサイダー・アート」とは、正規美術教育や既成概念、流行、伝統にとらわれず創作されたアートであり、人間の根源的な表現へのエネルギーを率直に強く感じさせるものをさしています。この概念はフランスの画家ジャン・デュビュッフェ(1901年-1985年)が提唱した「アール・ブリュット(生の芸術)」が始まりとなっており、近年、世界的な注目を集めています。

創作している人たちは、精神疾患患者、知的障害のある人、重労働者、霊媒師など様々で、特徴としては作家としての自覚が創作している人たちに無く、やむにやまれぬ衝動によって物を作り出しているということです。社会に向けて発信する意識が作家本人に無いために、なかなか表面に出現しにくいアートとも言えます。そのために、芸術的な評価、価値が見出されないうちに破棄されてしまうことが少なくありません。

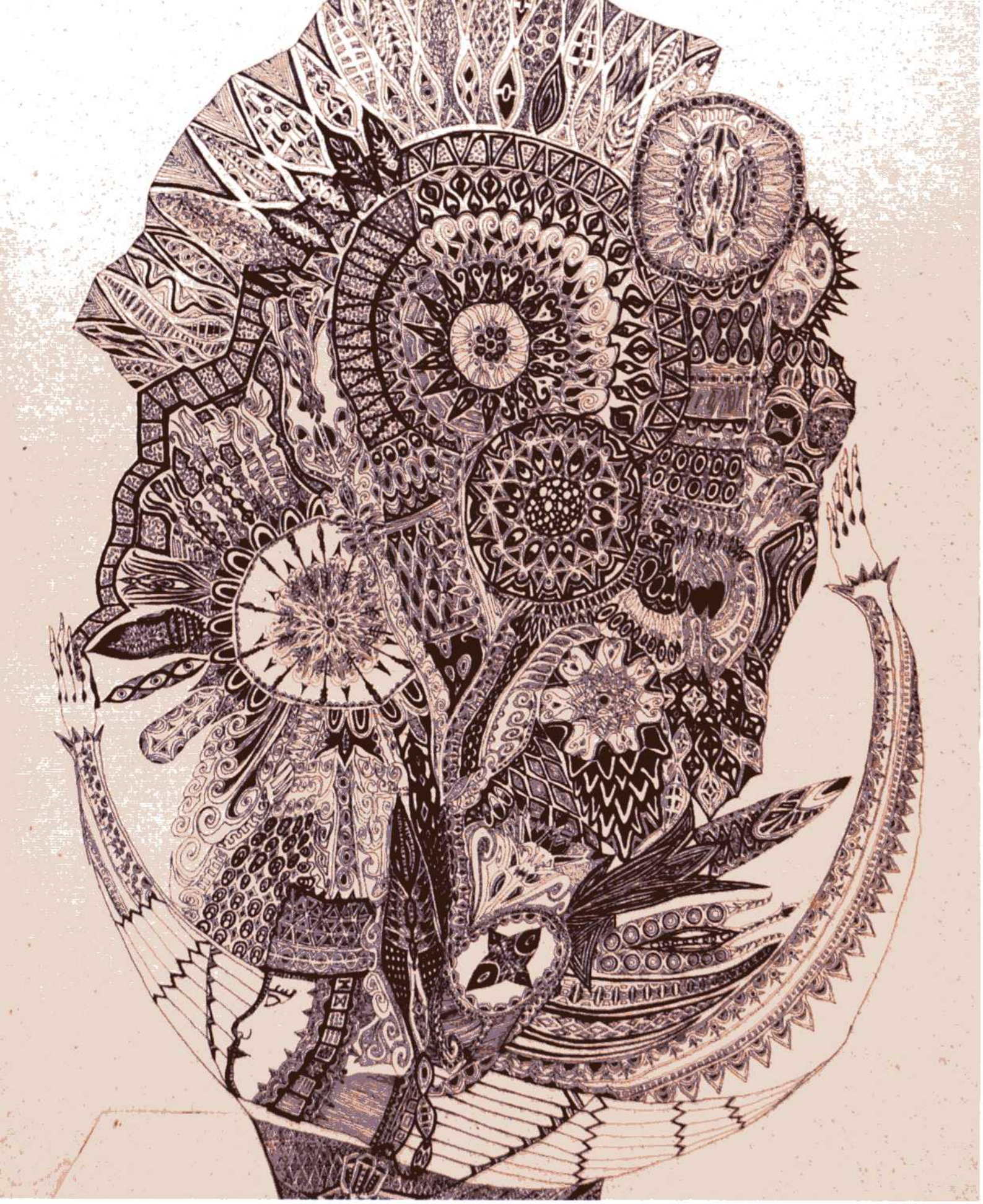
NPO法人ラポラポラ(旭川)では、北海道におけるアウトサイダー・アートの調査をこれまで行なってきました。富良野市、札幌市、北見市、滝川市など全道の様々な地域の施設、病院、ご自宅を訪ねて、創作活動をされている方たちを見て回り、数々の素晴らしい作品を発見することが出来ました。この図録は、その調査によって明らかとなった作品を展示した「北海道のアウトサイダー・アート」(2009年10月24日～2010年1月14日、北海道立旭川美術館にて開催)を記念して制作されております。
今後、北海道の新しい芸術文化として「アウトサイダー・アート」への理解が進み、世界に向けて「道産子アウトサイダー・アート」がはばたいていくことを願っています。

最後になりましたが、この図録の制作にあたり作品の掲載を許可頂きました作家の方々、助成を賜りました「日本財団」様、「太陽北海道地域づくり財団」様、展覧会の開催にご尽力頂きました北海道立旭川美術館様に深く感謝申し上げます。

NPO法人　ラポラポラ

Outsider Art
Hokkaido

北海道のアウトサイダーアート



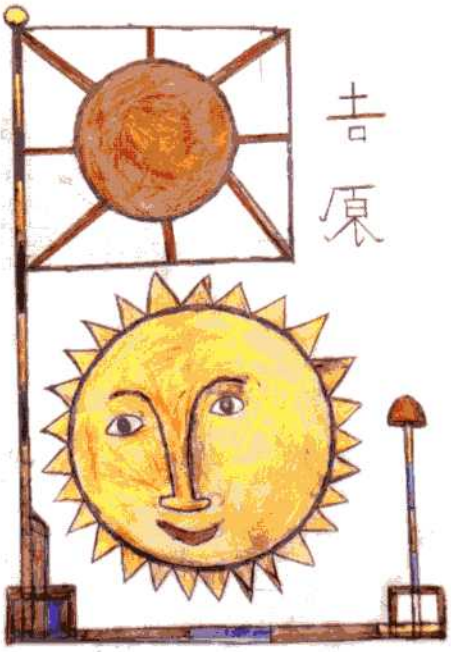
藤井 晋也

SHINYA FUJI

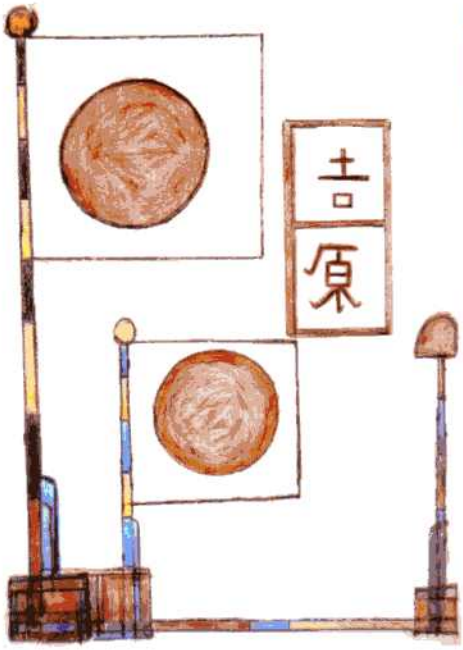
1969年生まれ。滝川市在住。
札幌のデザイン専門学校を卒業後、海外での創作活動を夢見て東京、愛知などで派遣労働をして資金を貯めていたが、23歳頃から統合失調症の症状が現れ幻聴に悩まされるようになったという。ロック音楽を聴くことが好きな藤井の部屋には多くのカセットテープがあり、「線は音の波動によって生まれて行く」という。音の波動は画面の中心から奏でられ、広がっていっている。クラフト紙に製図用のペンで下書きもなく描き進めており、本人にも最終的な形がどのようになるのか想像がつかない。すべてはラジカセから流れてくる音がイメージとなっている。

2

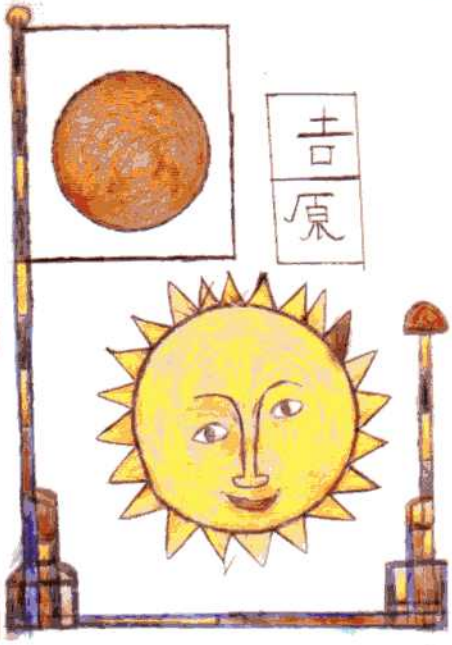
3



4



5



6

吉田 幸敏

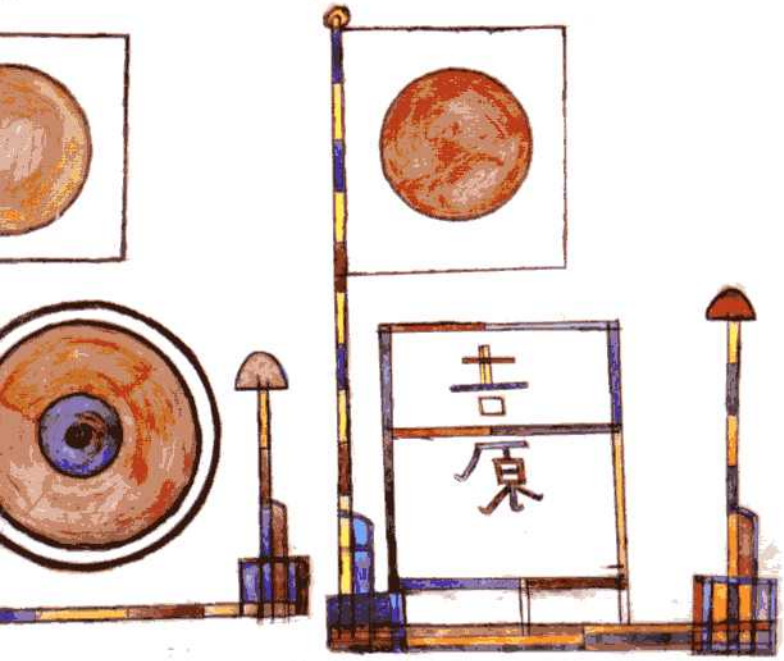
YUKITOSHI YOSHIDA

1955年生まれ。当麻町在住。
当麻町にある福祉施設、当麻かたるべの森にて創作活動を始める。当初は人の顔をモチーフとしたものが多かったが、近年は動物図鑑を参考に描いている。オイルパステルで何度も何度も塗り重ねては、削り出すということを繰り返し行い、重厚感のある画面を作り出している。

いつもニコニコとしている吉田ではあるが、福祉施設入所前には牧場で不遇で過酷な労働を強いられていた状況が長く続いていたという。
安住の地を得て現在は一心に絵を描くことに没頭している。

9

10



7　8

吉原 長次郎

CHOJIRO YOSHIHARA

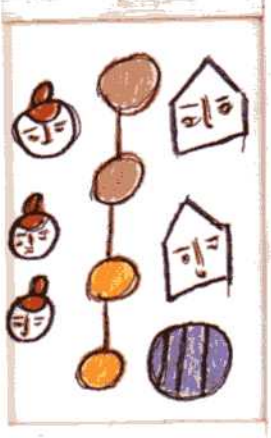
1933年生まれ。生田原町在住。
日の丸の旗が高々と掲げられ、太陽が遮断機のようなところに浮いている。何とも不思議な絵である。吉原の描くモチーフはほとんど同じであり、遮断機の上に浮いているものが、他に「消火栓ボタン」「吉原」ぐらいである。繰り返し、繰り返し、これらのモチーフを描くことに執着するあまり、手首や腰を痛めてしまうこともあるという。現在は1日に描く枚数を制限している。それまでして、このモチーフを描く理由は定かではないが、戦争など、衝撃的な体験もあるのではないかと思われる。

高橋 ヒサ子

HISAKO TAKAHASHI

1937年生まれ。剣淵町在住。
57歳から絵画を描くようになる。本人によると小さい頃からいつも母の不在の時間などに塗り絵をしていたそうで、当初は母親の書いた線に塗り絵をしていたが、その後は自分で線を描き塗っていたとのこと。そのためか、現在もまず、ペンによる線画で数枚描き、その後まとめて色鉛筆により塗りこんでいる。昔を思い出しながら描いているのかモチーフは人形、振子の時計、りんご、団子などが多い。

60歳を過ぎてから独自のキャラクター「スター君」や、四角や三角の不思議な顔が多数描かれるようになる。また色の配色も鮮やかになっている。
描くものへの戸惑いはまったく無く、次から次へと途切れずに描き続ける。葉書サイズのものを描く事を好んでおり、一日に30から40枚を描いている。



13

畑中 亜未

TUGUMI HATANAKA

1973年生まれ。札幌市在住。
畑中の画面の特徴はクレヨンを強く塗り込んでいる筆圧によるところである。負担によって砕けたクレヨンのかけらを爪や指でなすりつけていることでこの画面が出来上がっている。畑中は興味ある対象を片っ端から描いている。その興味のの向く所はとてもユニークで、国道36号線、曙や武蔵丸などの力士、犬や猫の数など、創作の対象はその時の関心のある物事によって展開されている。対象としているものをストレートに力を込めて描く。これが大きな魅力となっている。

14

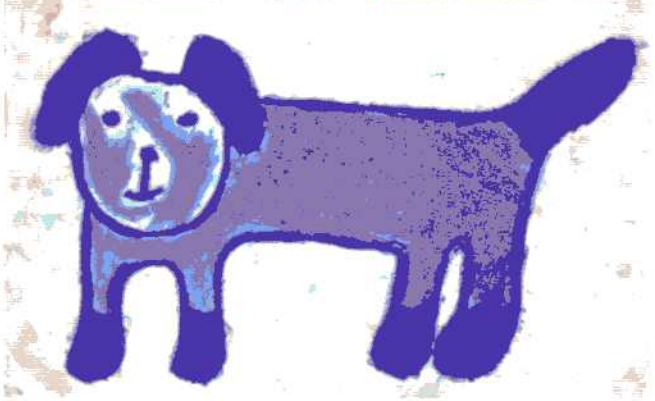
この彼女の興味の移り変わりは母親の影響が強いようで、母親の言動や行動、日々の暮らしに特に興味、感心が高いことが伺える。

16

17

18

19



20

得能 サチ子

SACHIKO TOKUNOU

1950年生まれ。深川市在住。
L字型の小さい線を連ねていくことでマス目を生み出し、ひとマスごとに異なった色をフェルトペンで着色している。

得能が、この独自のスタイルとなる表現方法を獲得したのは、２０００年の時に描いた傘の絵だった。傘の骨を丁寧に一本一本線で描き分けていき、その格子となった部分を一つ一つ塗り分けたのがきっかけとなった。

得能の創作動作は特徴的で、小さく仕切られた１マスに着色する際、得能はマーカーのキャップを外し、塗り、そして終わるとキャップを閉めるという一連の動作をひとマスごとに行う。しかも、一回一回ペンの色を変えている。一度に数カ所をもまとめて塗るような事は行わない。規則正しいこの儀式のような一連の動作に、ひとつひとつのマス目の重要性が伝わってくる。

21

23

大梶 公子

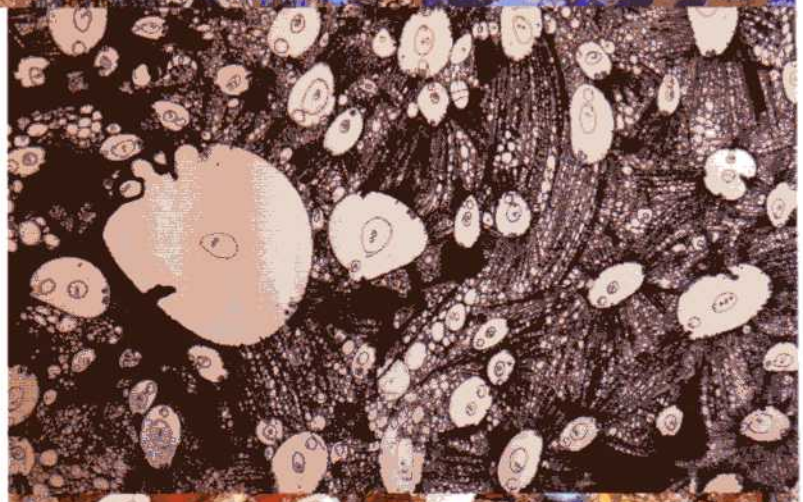
KIMIKO OOKAJI

1950年生まれ。北海道深川市在住
大梶がこのような作品を制作したきっかけは1999年頃からで、無数に並んだ「丸」の中に「丸」を描き出したことであった。それがいつしか目や鼻を印象つけるものとなり、やがて「丸」には手や足と思われる線がそれぞれに引かれはじめた。そして、ついには毛も生えてきたのである。

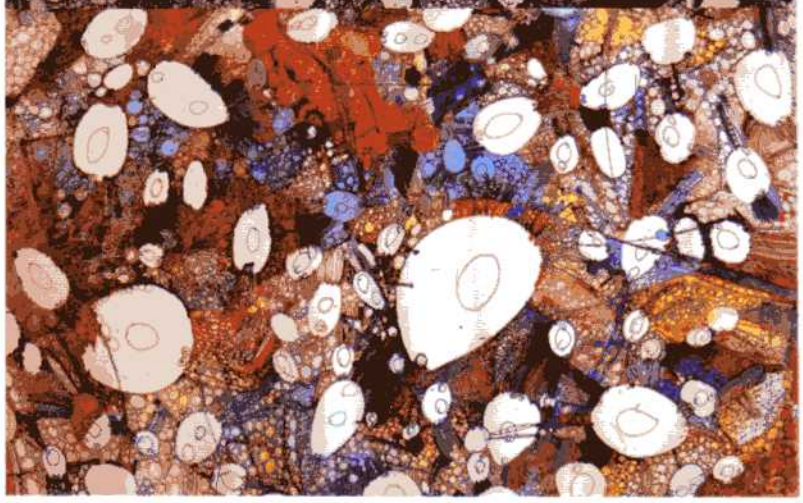
「丸」は子宮の中で卵子が細胞分裂を繰り返して「人」へと形成されていくのと同じ過程をたどって、「人」へと形作られていったのである。古来から「丸」は重要な図形であり、仏教では真理があると言われている。終わりも始まりも無い「丸」は永遠の循環である輪廻を表している。

作者にとっては無意識的であろうが、普遍的なイメージが繰り返し、繰り返し描き込まれており、見る者にとって大きな魅力を醸している。

24



25



平瀬 敏裕

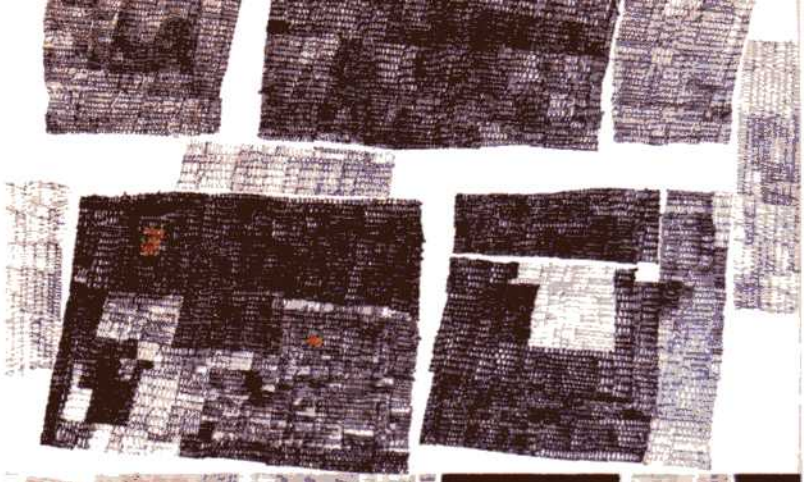
TOSHIHIRO HIRASE

1971年生まれ。北海道深川市在住。
無数の×印を編み物のように、一定の規則で並べて描き込んでいる。1枚の作品が出来上がるまでには2.3か月の時間がかかる。

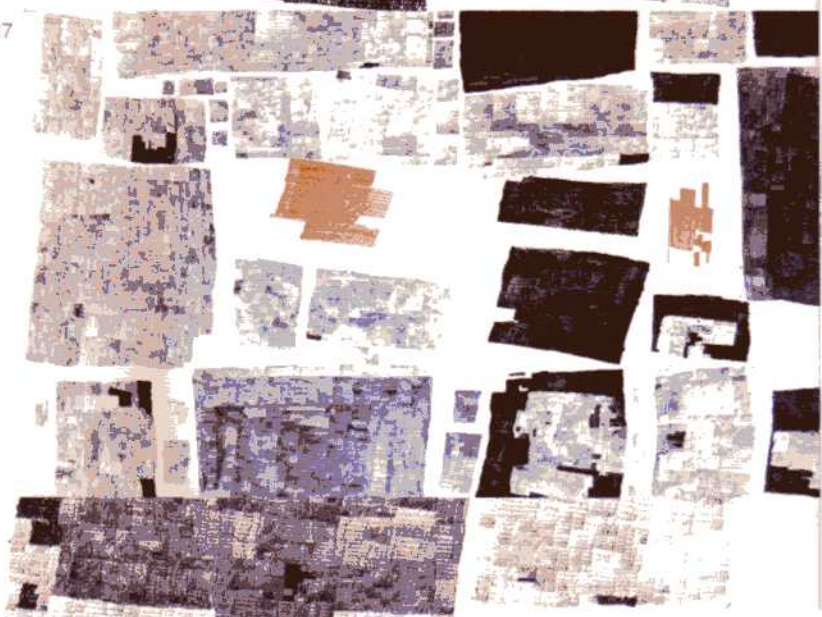
このような制作スタイルになったのは2001年にノートの片隅に書いた×印8つが始まりだった。それから毎日、平瀬はノートに×印を書き連ねた。平瀬にとって、この×印は一つの文字であると思われる。人は文字を伝達の行為に利用し、それは記録とする。しかし、一方で何かを伝達する以上に「文字を書く」という行為は精神の高揚感にもつながっている。

平瀬は独自の「文字」を手に入れ、それを連ねることでの快楽と、独自の絵画技法を手に入れたのである。

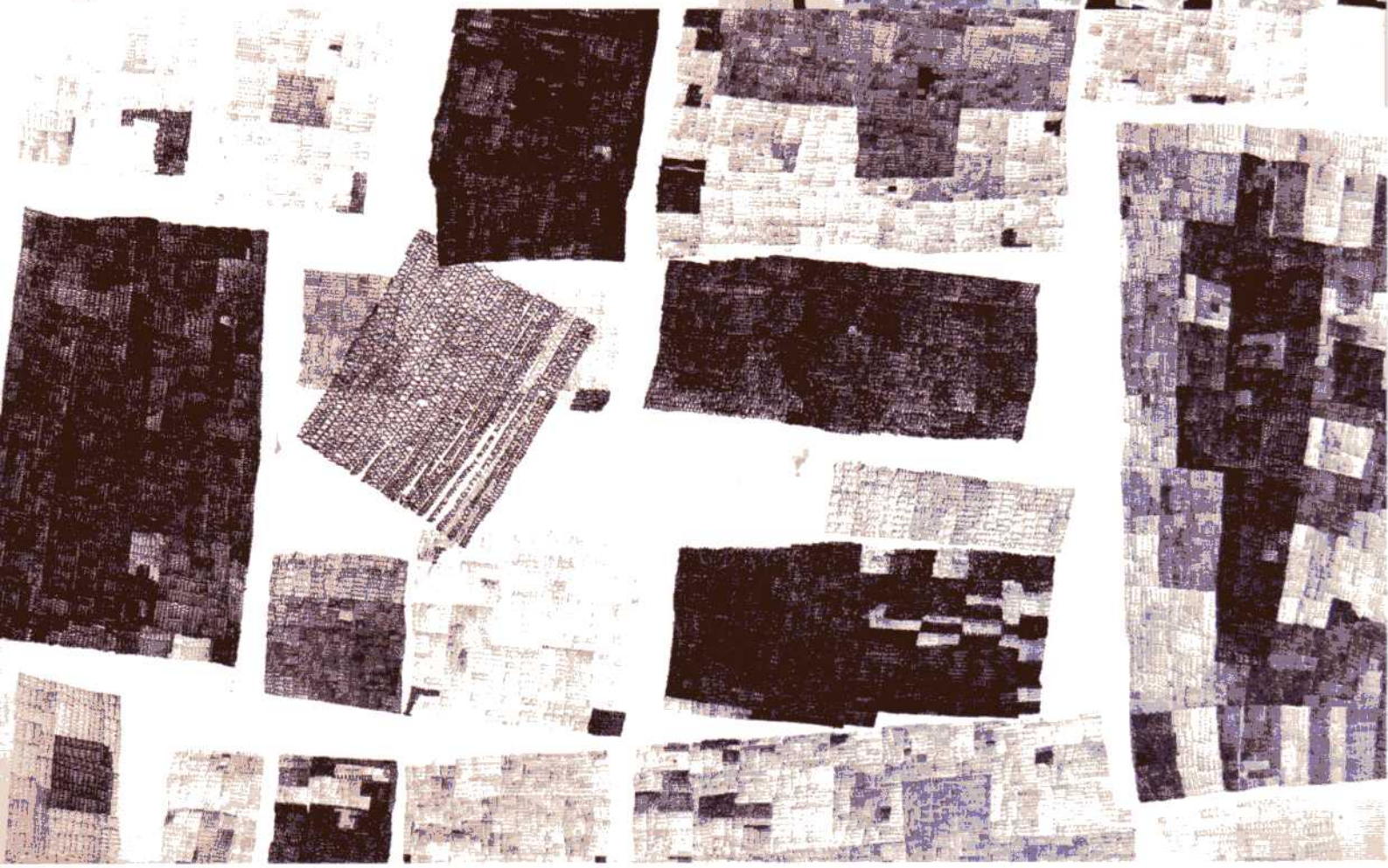
26



27



28



臼井 愛

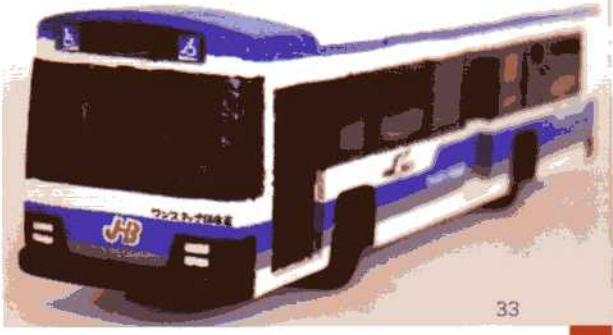
AI USUI

1987年生まれ。洞爺湖町在住。
小学校５年の時に有珠山が噴火し、その影響で学校の環境が著しく変化したことがきっかけとなって不登校となる。それ以来、自宅で絵を描き続けている。

創作は、まず線を引き、そして、ひとマスごとにフェルトペンで塗り分けている。このモザイク文様の中にしばしば小さく描かれている顔を、臼井は「ともだち」という。

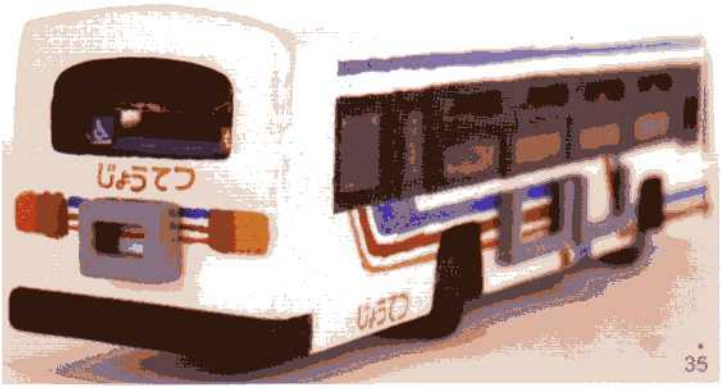
臼井の絵画は、周囲に取り巻く時間、色彩を丹念に組み合わせ、それらを結晶化させているかのような不思議な印象を見る者に与える。

32



33

34



35

西本 政敏

MASATOSHI NISHIMOTO

1976年生まれ。札幌市在住。
作品はとても精巧に作られており、椅子の模様までも細かく描き、窓にはプラスチック板がはめ込まれるなど、西本の細部へのこだわりは非常に強い。
通所の福祉作業所で糸鋸を利用し、作業で余った木片を自分の創作の材料に使用している。作業所では部品を切断し、組み立てと塗装は自宅に持ち帰って行っている。自宅の机の上は、部品が無数に積み上げられていて、さながら自動車工場のようである。

全体の形を把握して対象となるものを認識し、その後、細部に意識をつなげていくことが一般的な物の見方であるが、西本にとっては、細かな部分が重要であり、それを組み合わせて全体を認識しているように思われる。そのような西本の物の見方と、独自の工夫、職人気質が融合して、この作品が生まれている。

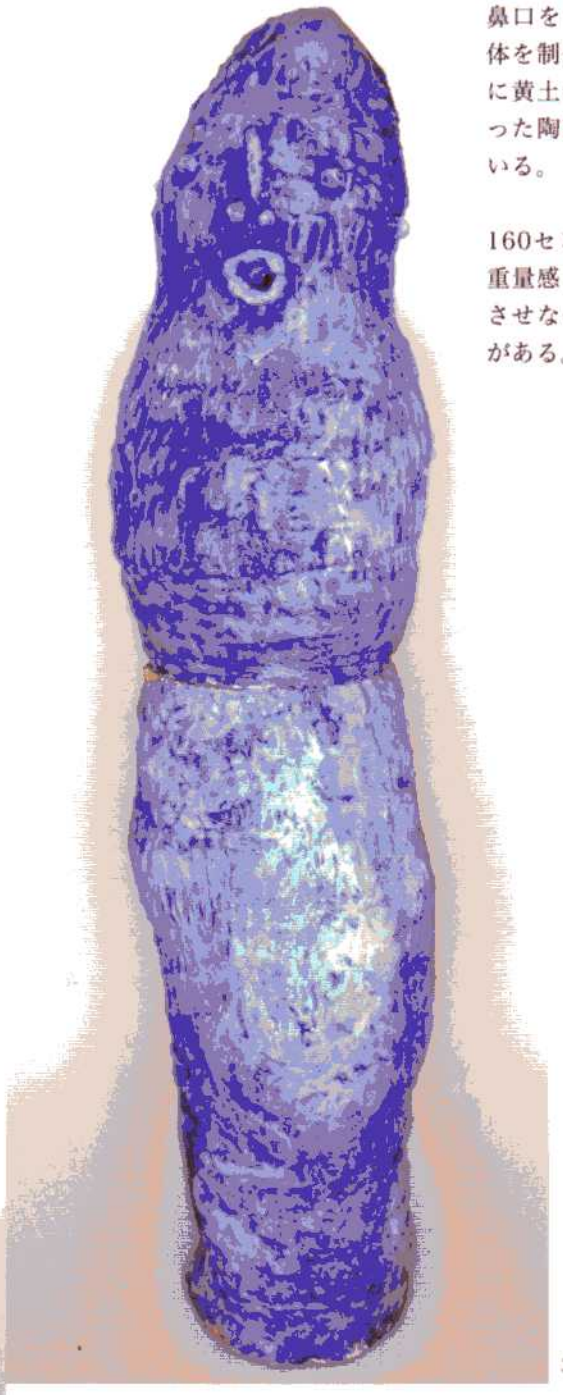
日當 学

MANABU NITTO

1977年生まれ。北海道剣淵町在住。
日當学は1993年よりに剣淵町にある福祉施設、剣淵北の杜舎で粘土による造形を始めた。当初は小さなお面を制作していたが、1996年頃から自分の背丈よりも大きな作品を目的に制作する。

作品は下部と上部の2分割となっている。粘土の紐を積み上げていき、最後に目鼻口を付ける。ほぼ1日で1体を制作してしまう。素焼後に黄土やベンガラ、呉須といった陶芸材料により着色している。

160センチを超える大きさ、重量感とは裏腹にそれを感じさせないユーラモラスな愛嬌がある。



横山 篤志

TOSHIHIRO HIRASE

1976年生まれ。富良野市在住。
横山は子どもの頃から手先が器用であり、形、ロゴ、マークに対してのこだわりが非常に強く、標識、天気図などに対する興味から、それらをモチーフにして模倣を繰り返し行なっている。

サトウ製薬のキャラクターの「サトちゃん」に、こだわりを持つようになったのは10年前からで、ドライブの際に通りかかった薬局の前においてある「サトちゃん」を記憶して制作している。ただ模倣するだけではなく実物を忠実に作り出しており、実物が汚れていれば同じところを汚して制作している。

横山は「サトちゃん」という長年変わらずに町なかに存在する確かな形を「創作」として生活に取り入れることで、自身のメンタルなバランスを保っている。

掲載作品目録

	掲載番号	題名	制作年	縦または高さ×横×奥行き(mm)	材質
藤井晋也	1	無題	2004	420×295	紙・ペン
	2	無題	2009	220×170	紙・ペン
	3	無題	2009	280×230	紙・ペン
吉原長次郎	4	無題	2005～2009	380×270	鉛筆・色鉛筆・紙
	5	無題	2005～2009	380×271	鉛筆・色鉛筆・紙
	6	無題	2005～2009	380×272	鉛筆・色鉛筆・紙
	7	無題	2005～2009	380×273	鉛筆・色鉛筆・紙
	8	無題	2005～2009	380×274	鉛筆・色鉛筆・紙
吉田幸敏	9	ライオンに襲われた水牛	2009	380×540	オイルパステル・紙
	10	サル	2009	380×541	オイルパステル・紙
	11	サイ	2009	380×542	オイルパステル・紙
高橋ヒサ子	12	無題	2004～2007	148×100 40枚	ペン・色鉛筆・紙
	13	無題	2004～2007	148×100 40枚	ペン・色鉛筆・紙
	14	無題	2004～2007	148×100 40枚	ペン・色鉛筆・紙
	15	無題	2004～2007	148×100 4枚	ペン・色鉛筆・紙
畑中亜美	16	すもうの横綱武蔵丸	2002	355×250	オイルパステル・紙
	17	青いタヌキ(1ぴき)	2002	250×175	オイルパステル・紙
	18	青いタヌキ(2ひき)	2002	250×370	オイルパステル・紙
	19	イヌ	2002	260×360	オイルパステル・紙
得能サチ子	20	無題	2005	500×950	油性ペン・水性ペン・紙
	21	無題	2006	450×550	油性ペン・水性ペン・紙
	22	無題	2003	980×675	油性ペン・水性ペン・紙
大梶公子	23	無題	2000～2005頃	600×920	油性ペン・水性ペン・紙
	24	無題	2000～2005頃	720×1040	油性ペン・紙
	25	無題	2000～2005頃	700×1000	油性ペン・水性ペン・紙
平瀬敏裕	26	無題	2001～2009頃	600×900	油性ペン・紙
	27	無題	2001～2009頃	600×900	油性ペン・紙
	28	無題	2001～2009頃	685×1000	油性ペン・紙
臼井　愛	29	無題	2008	545×395	油性ペン・水性ペン・紙
	30	無題	2007	395×545	油性ペン・水性ペン・紙
	31	無題	2008	395×410	油性ペン・水性ペン・紙
西本政敏	32	天然ガス自動車	2005	70×60×210	アクリル絵の具・プラスチック板・木
	33	ジェイアール北海道バス	2006	80×60×235	アクリル絵の具・プラスチック板・木
	34	じょうてつバス(前方)	2000	65×60×240	アクリル絵の具・プラスチック板・木
	35	じょうてつバス(後方)	2000	65×60×240	アクリル絵の具・プラスチック板・木
日當　学	36	無題	2005	1800×350×350	陶・顔料
	37	無題	2006	1600×400×350	陶・顔料
横山篤志	38	サトちゃん	2000～2009頃	530×300×350	紙・油性ペン・水性ペン・セロハンテープ・のり
	39	サトちゃん群像	2000～2009頃	120×50×50～ 250×120×120	紙・油性ペン・水性ペン・セロハンテープ・のり

Outsider Art
Hokkaido

北海道のアウトサイダーアート

企画・制作・発行：NPOラポラポラ
編集・文：工藤和彦
写真・デザイン：今津智士
助成：日本財団　太陽北海道地域づくり財団

発行所：NPOラポラポラ
〒070-0037
北海道旭川市7条通6丁目シャンノール緑道101
TEL 0166-29-3836

印刷：株式会社あいわプリント

NPO ラポラポラ
http://npo.lapolapola.com

Outsider Art
Hokkaido
北海道のアウトサイダーアート

企画・制作：NPOラポラポラ